幼稚園教育を生かした体育の授業づくり

～ 表現遊びから運動の楽しさを学ぶ ～

大野台小学校　**中澤　蘭**

Ⅰ　研究のきっかけ

本校では２７年度から１年生に対し､「大野台小すこやかプラン」(ソーシャルスキルトレーニング）の導入を行った。「大野台小すこやかプラン」の導入の背景に「小１プロブレム」がある。基本的な生活習慣が身に付いていない、他者とのかかわりが苦手である、自制心や耐性、規範意識が十分に育ってないなどの課題がある。昨年度の１年生の実態として、教室において学習に集中できない、教師の話が聞けずに授業が成立しないなど学級がうまく機能しない状況であった。これらの原因について調査文献[1)2)3)]から、幼稚園・小学校教育の特徴（違い）によるものと考えた。

	幼稚園	小学校
教育の目標	**方向目標** 「～味わう」「感じる」等の方向付け	**到達達成** 「～できるようにする」といった目標へ到達度重視
教育課程	**経験カリキュラム** 生活や経験を重視	**教科カリキュラム** 学問体系を重視
教育方法等	**個人、友達、小集団** ・「遊び」を通じた総合的な指導 ・教師が環境を通じて幼児の活動を方向づける。	**学級・学年** ・教科等の目標・内容に沿って選択された教材によって教育が展開

＜教育の特徴＞

幼稚園	小学校（低学年）
健　康 人間関係 環　境 言　葉 表　現	国　語 算　数 生　活 音　楽 図画工作 体　育 道　徳 特別活動

＜教育要領・学習指導要領＞

幼稚園は、集団における基本的生活習慣を育成し、小学校は、幼稚園教育を踏まえ、規律ある学校生活を送ることができるよう指導することが求められる。実際の小学校現場は、幼稚園教育と小学校教育との関係を十分理解・意識せずに、あたかも児童を白紙の状態から指導しようとする傾向があるように感じる。このような教育の特徴の違いに馴染めない児童は、小学校教育に対応できるようになるまで時間がかかっている。

幼稚園と小学校の教育が連続性・一貫性をもち、共有しつつ共に手を携えて解決のための取り組みを進めていかなければならないと感じている。

幼児期から児童期にかけては､「学びの芽生え」の時期から「自覚的な学び」の時期への円滑な移行により学びに対する意欲や関心が高まると考える。「学びの芽生え」とは「楽しいことや好きなことに集中することを通じて、様々なことを学んでいくことであり、幼児期

における遊びを通した学びがこれにあたる。

一方「自覚的な学び」とは学びの意識があり、集中する時間とそうでない時間（休み時間）の区別がつき、与えられた課題を自分の課題として受け止め、計画的に学びを進めることであり、小学校における教科等の授業を通した学びがこれにあたる」[4]とある。

今回の研究は、幼稚園と小学校の教育が連続性・一貫性をもつようにしたい。そのため幼児期における遊びを通した学びを生かしやすい体育（表現遊び）を選んだ。表現遊びを通して、「自発的な学び」の基礎づくりを目指したいと考えた。

Ⅱ　児童の実態

1　入学前の児童の実態

先に述べた課題を踏まえ、幼稚園や保育園での運動経験や運動の苦手意識がどのくらいあるのか、年長を対象に３つの園に協力してもらいアンケートを行った。アンケートの項目は次の通りである。

①年長の子ども達の運動レベルの実態
（組み体操で扱った技、跳び箱や鉄棒などの幼稚園の健康領域で扱う運動はどのようなものか）
②１日の中での外遊びの時間
③運動の苦手意識をもっている子どもの割合

(1)　Ａ園について

Ａ園では年長の段階で組み立て体操を行っている。３段ピラミッドや６人技のはしご車を扱い全員ができている。男子の１～２組は一発で技を決めることができていた。鉄棒では前回り下りは全員でき、逆上がりはクラスの３割、空中逆上がりは２～３人ができた。短縄跳びについても前跳びは全員でき、後ろ跳びは３割ができていた。跳び箱に関しては跳べる幼児が少なかった。

運動の苦手意識をもっている幼児はいないが消極的な幼児はいるようである。

また、外遊びの時間は１日 1.5 時間程度であった。Ａ園の特徴として、外遊びや健康領域の運動はバランス良く行っている。

(2)　Ｂ園について

Ｂ園では運動に力を入れており、柔軟は開脚して体が全員床につき、ブリッジ歩きや立ちブリッジから蹴り上がり、側転につなげる技も年長の子どもは全員できている。逆立ち歩きに関してはクラスの 1/3 ができた。毎朝かけっこに取り組み、リレー遊びなどを入れて１時間は走っている。跳び箱に関しては、６月の時点で６段は全員が跳べ、９段はほぼ全員が跳べた。10 段はクラスの 2/3 程度、11 段は 1/3 程度、13 段は１人が跳べている。

外遊びでは、縄跳びやサッカー、トランポリンなど多様な動きができるよう環境をつくっている。

運動の苦手意識をもっている幼児はいるがやりたくないのではなく、自然と出来るようになるまでの過程が苦しいと感じているようである。

Ｂ園の特徴として、運動中心の幼稚園教育であるので運動量は、２つの園よりも多い。

(3)　Ｃ園について

Ｃ園では遊具（うんてい、鉄棒、のぼり棒等）は年長になると全員できていた。

また、跳び箱の６段や大縄跳び、短縄跳び、鉄棒（前回り）は全員ができている。

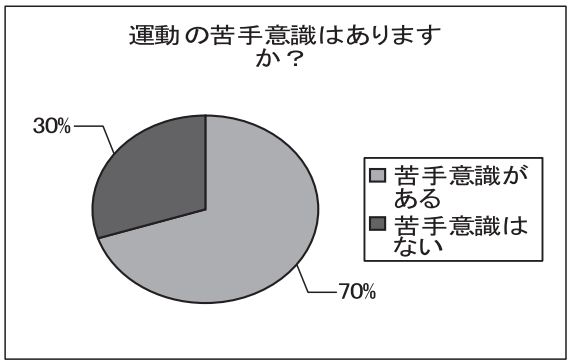
運動の苦手意識をもつ幼児は３割くらいで、年中の時点で得意・不得意を自覚しはじめていたようである。

外遊びは全員が外に行き、体を使った運動遊びをする割合は、９割と年長に上がるにつれて身体を動かす遊びが多くなるようだ。

Ｃ園の特徴として、遊び中心の教育であるので、運動としての経験は少ないようである。

2　入学後の児童の実態

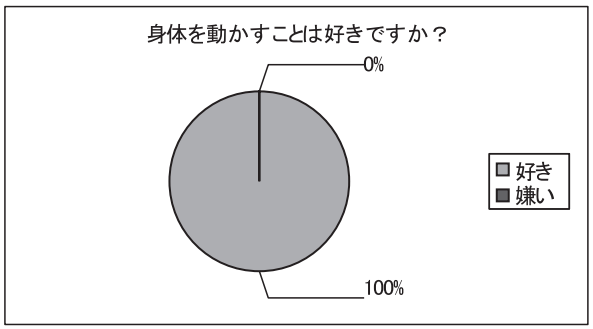
(1)　運動の苦手意識調査



入学前の児童の実態のように運動経験の量の違いに児童も不安を感じている。特にC園は遊び中心であったため運動経験の量がその後の運動習慣や体力・運動能力に大きな影響を与えていることがうかがえる。

現時点で本学級の児童は、授業中に運動でできないものがある児童もできるようになりたいという意識が高い。更に楽しくできるようになったら運動がもっと楽しくなるのではないかと考えている。

(2)　身体を動かすことの好き、嫌い



休み時間になると全員が校庭に出て身体を動かした遊びをしている。

Ⅲ　研究の構想

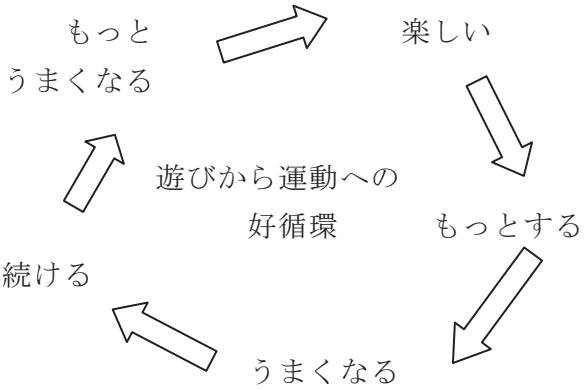
児童の実態を踏まえ３つの柱を中心に研究を行った。

(1)幼稚園での運動レベルを生かし､幼稚園教育で行った内容を踏まえ、本学級の外遊びで身体を動かすことが好きという特徴から“遊びから運動へ”の楽しさを学んでいく。

(2)幼児期の運動経験の違いを他人と比べてしまう劣等感が運動嫌いになるので“自分の中での比較”をできるようにする。

(3)できないこともできるようになりたいという意欲を高めるための環境づくりの工夫を行う。

以上３つを踏まえ、学びのイメージを考えた。



＜学びのイメージ＞

この好循環にするため、幼稚園教育で培ったことを基に、運動の苦手意識をなくし、小学校の体育を「もっとやりたい。」「自分たちで工夫してみたい。」と今までの経験を生かしながら小学校の体育が楽しいと思う授業づくりを行っていきたいと考えた。

Ⅳ　単元計画

単元名：台小シーズンパレード
（リズム・表現遊び）

1　オリエンテーション

学習前のオリエンテーションで最初に、実際の運動経験とレベルを把握するため、幼稚園で扱った組み立て体操の技の発表を子ども達に行った。その中で一つ一つの技では何を表現しているのか、どのようにやればできるようになるか、伝え合いを行った。

この時点で 26 人いる児童の中で２人、幼児期に組み立て体操を経験していないことが明らかになった。

2　楽しみ①

「楽しみ①（習得型）」では、幼時期に外遊びの中で、ごっこ遊びは全員したことがあったので、ごっこ遊びの経験を生かし、子ども達

に「イメージカード(絵)を見て、身近なものや動植物に変身ごっこをしよう」とめあてを設定した。

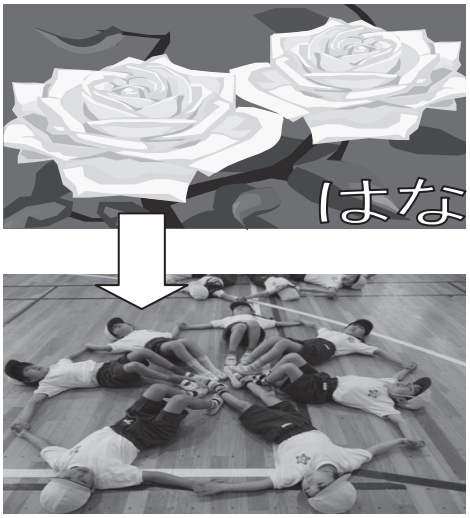
初めに、思いつくまま自由に動き、即興表現ができるよう、オリエンテーションの中でお互いを認め合うルールづくりをした。

即興表現ができない児童に対しては、友達の真似をしてもいいことや教師と同じ動きをしてもいいと言葉かけした。即興表現ができるようになったら「カブトムシがおんぶしているところ」など、幼稚園で行った手遊びや身体遊びの要素を取り入れて、表現を組み合わせた。

３　楽しみ②

「楽しみ②（活用型）」では、身近にある題材をテーマに、本校にある「みずきの森の四季の様子を身体で表現すること」をめあてに表現遊びを行った。

春に咲く花の様子や夏の通り雨、秋の落ち葉が舞う様子や冬の雪が積もった様子を実際にみずきの森の写真を見て、思いつくままに身体で表現を行った。「楽しみ②」の学習で、幼稚園で扱った組み立て体操の花やおうぎ、波などの動きを取り入れられるように、イラストカードの絵を変え、形に注目したものにした。幼児期の運動経験につながるようにした。また、イメージしやすいように音楽や効果音を活用した。



＜形に注目したイラストカードと表現した花＞

４　楽しみ③

「楽しみ③（探求型）」では、「楽しみ①・②」で学習したことを生かし、「みずきの森の妖精の話」をストーリー化させて、子どもと「“みずきの森の妖精の話”を曲に合わせて、クラス全員で表現しよう」とめあてを決めた。表現遊びを個人や小集団で行っていたものを集団（学級単位）でリズムに合わせて表現を行った。その際、他のクラスとの見せ合いを行うことや、幼稚園の経験を取り入れた単元計画を最初から行うことで、幼稚園教育と小学校教育が連続性・一貫性をもち、それぞれの教育の違いに躓かないよう、楽しみながら、意欲的な取り組みにつながるようにした。

Ⅴ　手だて

幼稚園教育を生かし、運動の楽しさを育成するために、以下の３つの手だてを取った。

１　幼稚園教育を取り入れ遊びから運動への円滑な移行

幼稚園教育を取り入れて小学校教育に円滑に移行できるようにするため、授業の始めや合間に手遊びや身体遊び（カレーライスの歌や鬼のパンツなど）を行い、遊びながらみんなの前で表現する楽しさを学べるようにした。幼稚園によって、手遊びや身体遊びの経験がことなるため、教師が見本を見せたり、DVDを使って遊び方を例示したりした。こうすることで、自分はみんなと違い、経験がないからできないという劣等感を抱くことなく楽しみながら遊ぶ姿が見られた。

また、手遊びや身体遊びを使って応用バージョンやオリジナルバージョンを児童に考えさせて、クラスで共有し、遊びながら運動の量を増やしていった。

絵本の読み聞かせでは、幼稚園では最初から最後まで読み聞かせを行うが、途中で話を止めて、この話の続きがどうなるのかを児童に考えさせた。これにより、その場で想像する力がつき、即興表現の土台になると考えた。

実際、子ども達は色々な経験や挿絵の情報から様々な話の続きを読み聞かせの中ですぐに考えることができた。

また、登場人物の動きを身体で表現する児童もいた。

２　環境作り

（１）イラストカード

イラストカード（絵）を見せて、真似をすることで、変身する動植物のことを知らなくても、即興表現をするきっかけを与えた。実際に言葉だけで「〇〇に変身！」と投げかけた時は、数名はすぐに即興表現ができたが、イラストカードを見せて「〇〇に変身！」と言ったときの方がほぼ全員がなりきって踊っていた。また、イラストカードを使うことで、与えられた題材の特徴を捉えることができた。加えて、音楽や効果音を使うことで、視覚的に題材を捉えるだけではなく、聴覚的にも題材の特徴を捉えることができたので、児童の即興表現の幅が広がり、様々な動きをしている姿が見られた。

＜動きの例＞
・花を吸う様子
・針で刺す様子
・飛ぶ様子
などを表現していた。

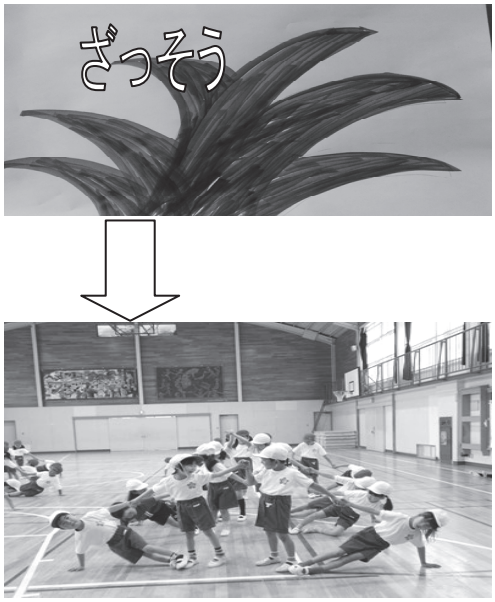
＜動きの例＞
・木に止まる様子
・戦う様子
・飛ぶ様子
などを表現していた。

＜イラストカードの例＞

（２）気付きを促せる言葉がけ

教師の声の掛け方や投げかけ方などの言葉を大切にした。「〇〇さんのゆっくりした動きが象によく似ているよ」と言葉かけすると、周りの児童も真似をしてみたり、象の鼻を表現して他の様子を表現してみたりする姿があった。

また、「雑草に変身！」と課題を与えたときに、形に注目したイラストカードを見せた。雑草の形を読み取った児童が「雑草の形はちくちくしているね」と発言した。このつぶやきをもとに、「この雑草のちくちくした形は、どうやったら身体で表現できると思う？」と問いかけをした。すると、近くの友達と話し合い、思いつくままに即興表現をし始めた。ある児童の「１人では難しい」とのつぶやきを聞いた友達は、「幼稚園の組み立て体操みたいにみんなでやってみようよ」と周りの友達に投げかけていた。その中である児童が、「雑草のちくちくした形が幼稚園で扱った組み立て体操のおうぎの技に似ているね」と組み立て体操の技で表現できることに気付き、幼稚園の運動経験を生かして、おうぎで雑草を即興表現することができた。教師の声の掛け方や投げかけ方、問いかけ方を大切にすることで、児童は考え、幼稚園の運動経験につなげて参加していた。

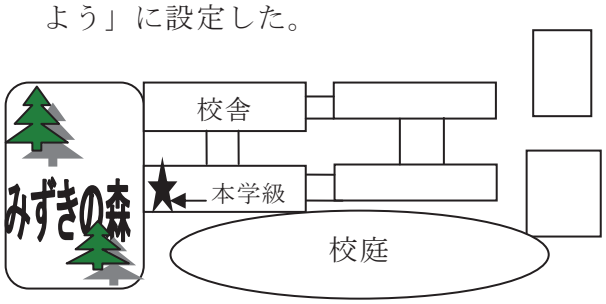


＜イラストカードの形から考えて表現した雑草＞

（３）身近で関心が高い題材

楽しみながら動きを選んだり、見つけたりできるように、課題を身近なものである

「みずきの森の四季の様子を身体で表現しよう」に設定した。



＜みずきの森の場所＞

春のみずきの森の様子を実際に観察に行き、雑草が生い茂る森の中に様々な植物が花を咲かせていることに児童が気付いた。これを表現するために、雑草の形や、花になるまでの成長過程（種の様子や双葉の様子）を「花は内側を向いて体育座りをしてから手をつないで寝転がることで花の形になる」や「種は身体を縮めて動かないでいると種に似ている」「双葉の形は幼稚園の組み体操で扱ったＶ字バランスでできるよ」など、具体的な動き（跳ぶ・回る・ねじる・這う・素早く走るなど）で題材の特徴を捉えることができた。夏・秋・冬も同様に、みずきの森という題材を捉え、生活や体験の中で感得した認識や関係などを組み合わせて課題を解決していく姿があった。

更に身体を動かすことの楽しさを学ぶために、発展として「“みずきの森の妖精”の話を曲に合わせて、クラス全員で表現しよう」と課題を設定した。個人や小集団で行っていた、表現遊びを集団（学級単位）のものにすることで、人とのかかわりを大切にした。人とのかかわりの中で決まりを守り、誰とでも仲良く踊ることや軽快な音楽に乗って、友達と調子を合わせて楽しく踊ることの習得をねらいとした。

Ⅵ　児童の学びの姿

１　Ａさん（女児）の学びの姿

Ａさんは幼稚園のときに組み立て体操の経験をしたことがない。学習前のオリエンテーションで、組み立て体操の技の発表を行ったときも、発表の輪から離れて様子を見ている状況であった。「組み立て体操をやったことがないからできない。」など消極的な発言を言っていた。手遊びや身体遊びになると、幼稚園で経験しているため楽しみながら遊ぶことができていた。Ａさんにとっての課題は組み立て体操の運動経験がないことによって、ギャップを感じ劣等感を抱いていることであった。

そこで、身体遊びの延長としてごっこ遊びを行った。曲は「さんぽ」を使い、探検家になろうと課題を与え、歌詞を動作化しながら自由に教室内を探検した。Ａさんは幼稚園で歌ったことのある曲であることや身体遊びが好きであったので、積極的に参加した。Ａさんが思いつくままに表現したことを教師が具体的に「一本橋を渡るときのぐらぐらした動きがいいね。」と即興表現を認める言葉かけで、意欲的に色々な動きを表現するようになった。

次の段階として、ごっこ遊びから集団で表現する運動（幼稚園で扱った組み立て体操の技）を取り入れた。即興表現ができるようになったＡさんに「友達が大きなお花に変身したいようだけど、一人ではできないと言っているよ。Ａさんも一緒に大きなお花に変身し

ない？」と言葉かけした。すると、友達の輪に自分から入り、組み立て体操で花の技を経験している友達に動き方を聞き、組み立て体操の技に自然と取り組むことができた。

また、「大きなお花だからもっと人がいた方がいいと思うよ」や「手を大きく広げた方がお花みたいだよ」と思いついたことを友達に伝える姿があった。ごっこ遊びを行い、即興表現に自信がついたＡさんは、次の課題を解決しようと集団の中に入った。そしてごっこ遊びの感覚で、自然と組み立て体操の技に取り組むことができた。“大きなお花”を表現する課題に対して、“大きなお花”を表現するための動きを選び、友達に教えることができた。

組み立て体操の経験がなくても、幼稚園教育で扱った手遊びや身体遊び、ごっこ遊びなどを取り入れて、幼稚園教育から小学校の体育の内容への円滑な移行を行うことで、経験の差による劣等感を抱かなくなり、表現することの楽しさを学ぶことができた。

また、教師の声の掛け方や投げかけ方などの言葉を大切にし、Ａさんにとって達成できそうな課題を設定することで、自分から課題と向き合い、友達と協力して解決をすることができた。

２　Ｂさん（男児）の学びの姿

Ｂさんは幼稚園教育の中で組み立て体操の経験をしたことがある。オリエンテーションでも同じ園だった友達に声をかけて積極的に習った技を披露した。手遊びや身体遊びも楽しく行うが、初めての手遊びであったり技だったりすると不安になってしまい、消極的になってしまった。

また、独創性があるためごっこ遊びをしても、一人だけ違う動きをしてしまい、身体で動植物を表現することが難しかった。そこで、イラストカードを見せて変身するものを課題として与えた。絵の真似をすることで、変身する動植物のことを知らなくても、視覚的に見て、即興表現をできるように手だてをとった。すると、絵を見て形や様子がわかったことで、課題にあった即興表現ができるようになった。

また、音楽や効果音を使うことで、視覚的に題材を捉えるだけではなく、聴覚的にも題材の特徴を捉えることが出来た。課題にあった児童の即興表現の幅が広がった。消極的になっていたＢさんだったが、イメージカードを使った即興表現ができるようになると、友達に「種から双葉になる動きの双葉って幼稚園でやったＶ字バランスに似ているよね」と発言した。周りの友達もＢさんの発言を聞き、すぐに「似ているかやってみよう」と声を掛け合い、双葉を表現しようと思いつくままに即興表現をし始めた。「一列で並ぶよりも円になった方が背中を寄りかからせることができてやりやすいよ」と友達に伝え、クラスで表現の仕方を工夫し始めた。

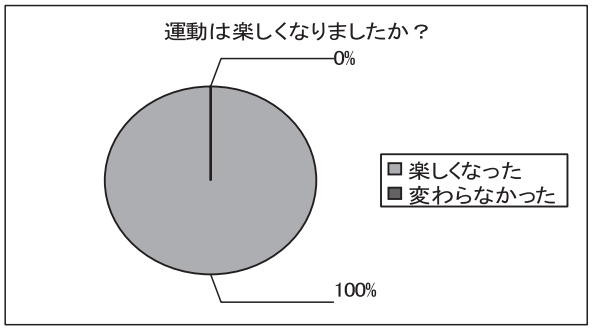
思いつくままに自由に表現する雰囲気を大切にすることで、児童は幼稚園の運動経験から表現の仕方を考え、表現運動につなげることができた。

Ⅶ　成果と課題

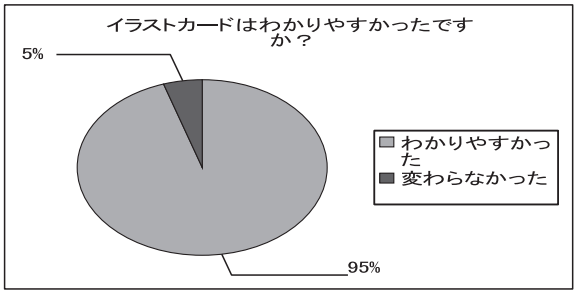
１　成果

幼稚園教育を生かして、遊びから運動移行するために、手遊びや身体遊び、ごっこ遊び

などの手だてをとったことで、小学校の体育の表現運動の内容である、音楽に乗って自由に踊ったり友達と調子を合わせたりして楽しく踊ることが達成できた。以下は、事後のアンケートでの意識の変化である。



運動の苦手意識があった児童も運動が楽しくなったと答えた。



イラストカードを使うことで題材の特徴を知り、それに合った動きを見つけたり選んだりしやすいと答えた。

題材も身近にあるみずきの森の四季は、生活経験(幼稚園教育の中で培われてきたこと)を生かすことができるため、子ども達の「妖精になりきってみたい」という気持ちを汲み取り、表現運動を進んで取り組む意欲につながった。

また、気付きを促す言葉かけで児童の気持ちが変化し、児童の動作や何気ないひと言を取り上げて褒めることで、友達のよさに気付き、のびのびと表現運動をすることができた。

そして、幼稚園教育で扱ったことを小学校の体育の授業につなげることで、児童が最初に感じていた幼稚園教育と小学校教育のギャップによる不安を解消することができた。環境作りでも幼稚園教育の内容を入れながら、成長段階に合わせて小学校の体育の授業につなげることで、身体を動かすことを楽しく行うことができた。子ども達から「体育が楽しい」「身体をもっと動かしたい」という言葉が出てきたことが今回の成果である。

２　課題

課題は次の２点である。

（１）教師の言葉かけや問いかけ方を間違えると、味わわせたい動きと全く違う動きになってしまうことである。味わわせたい動きを再度、選び直すのに時間がかかってしまった。言葉かけが曖昧になってしまったため、具体的な動きを示すことができなかった。

（２）題材設定については、教師が与えた題材であったので、動きを制限する題材になってしまった。子ども達のもっと工夫した動きができるように、今後は児童から出た題材を使い「自分たちで工夫してもっとやってみたい。」という意欲を高める体育の授業を行っていきたい。

今後は、表現運動だけでなく他の領域の運動でも楽しさを学べるように、幼稚園教育を生かした内容を導入で取り入れ、運動が楽しいと思える体育の授業づくりを行っていく。

参考文献

1)「小学校学習指導要領解説」体育編
平成２０年　文部科学省
2)幼稚園教育要領
平成２０年　文部科学省
3)「さがみっこのたいいく」

引用文献

4)幼少接続・座長試案（資料１－２）
文部科学省